
へだたり

晃明

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

へだたり

【Nコード】

N7651J

【作者名】

晃明

【あらすじ】

とある学校生活のワンシーンです。

季節の変わり目と心を照らし合わせて書いてみました。

とても短いです。

（前書き）

自分勝手にだらだらと（短いですが）書きました。

投稿するのがお恥ずかしいくらいですが他人の日記と思って気軽に立ち寄って頂けると光栄です。

へだたり

今日も仲間とお昼をたべよう。

午前の授業終了のチャイムと同時に席を立ち弁当を片手に一目散に部室へ走る。

この季節の廊下はとても冷え込んでいるが窓から見えるそらは澄み切っていて優しい光に包まれている。

夏の日差しと違って何処か頼りない気がするのは自分だけだろうか。

などと感傷に浸っているうちに部室の前にさしかかる。

引き戸に手を掛け、部室に飛び込みたいところだが、何かが自分の手を止めた。

自分の存在を認めてくれる場所が待っていてくれると思うと何だか怖くなってしまう。

本当に待っていてくれるのだろうか。

一呼吸置き、自身を奮い立たせもう一度冷たい金具に手を掛ける。

ガラガラガラ……。

部屋の中の対象が一点に集まる。

卑怯にも自分は相手が手を差し伸べてくれるまで何も口にしない。
ただ佇んで部屋と廊下との温度差に押しつぶれそうになる。そして
何か縫れるものと部屋の中を必死に見渡す。その時間がやけに長
く感じられいたたまれなくなる。

「はぎわら!」

自分の名前が呼ばれている。

本来なら喜ぶべきところだが素直にそう思えない自分がいた。

その響きは確かに自分のものなのだが自分の身体に留まらず、透き通ってしまふ。

部室内の暖かい空気がドアのレールの上に立つ自分の横を通り抜け冷たく長い廊下をかけてゆく。

（後書き）

こんなお粗末な文章を読んで頂きありがとうございますm（――）m

文章がまったくなっていないのは自身も承知なので感想、アドバイ
ス等頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7651j/>

へだたり

2011年10月6日18時12分発行